

文部科学省委嘱令和7年度幼児教育の理解・発展推進事業

幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会

I 目的

幼稚園・こども園の教育課程編成及び実施に伴う指導上の諸問題並びに幼児教育を取り巻く諸課題についての専門的な講義や研究協議等を行い、教職員の指導力を高め、幼児教育の振興・充実を図るため、幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会を開催する。

II 日程及び会場 令和7年7月23日(水) 9時15分～16時30分 小田原合同庁舎

9:15	受付・Zoom入場開始
9:30	開会 挨拶
9:45	講演 「幼保こ小接続を見据えた、幼児教育において育みたい資質・能力を踏まえた教育課程の編成について」 講師 文部科学省初等中等教育局 視学官 横山 真貴子 氏
11:45	事務連絡
12:00	昼食・休憩
13:15	分科会受付
13:30	分科会開始
13:40	提案1
14:10	提案2
14:40	休憩
14:55	分科会協議 ・グループ協議 ・全体共有
15:55	指導・助言
16:15	閉会 挨拶（各分科会ごと） ＊アンケート記入

【提案】

● 幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について

分科会1 (協議主題1)	〈提案1〉大磯町立たかとり幼稚園 〈提案2〉港北幼稚園・認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園
分科会2 (協議主題2)	〈提案1〉秦野市立つるまきこども園 〈提案2〉つるま幼稚園

● 協議主題と協議の視点

分科会1 (協議主題1)	<p>幼児教育施設間、幼児教育施設と小学校間における相互理解の促進</p> <p>①幼保小の先生が互いの教育内容や指導方法、教育の連続性・一貫性についての理解を深め、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を実現するためには、幼児教育施設間や幼児教育施設と小学校間において、どのような連携・協働を進めていくことが考えられるか。また、その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をどのように活用することが考えられるか。</p> <p>②幼児教育施設間や幼児教育施設と小学校間における連携・協働の成果を踏まえ、各園において、遊びを通して学ぶという幼児期の特性を踏まえつつ、小学校以降の教育を見据えて小学校以降の生活や学習の基盤を育成するためには、指導計画の作成や指導の過程の評価・改善等について、どのような工夫が考えられるか。</p>
分科会2 (協議主題2)	<p>架け橋期のカリキュラムの開発</p> <p>①教育の連続性・一貫性を踏まえ、幼保小が協働して「期待する子供像」や「育みたい資質・能力」を明らかにするとともに、これらを基にして「園で展開される活動」や「小学校の各教科等の単元構成等」等を具体的に明確にししながら、架け橋期のカリキュラムを作成していくためには、どのように進めていけばよいか。</p> <p>②架け橋期のカリキュラムの実効性を高めるなど、幼保小の接続の取組について、家庭や地域との連携を図りながら評価・改善・発展させ、持続可能なものとしていくためには、自治体や各幼児教育施設・小学校において、どのように進めていけばよいか。</p>

Ⅲ 分科会の記録

令和7年度幼児教育の理解・発展推進事業（幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会）研究成果の要旨

分科会 1 (協議主題 1)	幼児教育施設間、幼児教育施設と小学校間における相互理解の促進
-------------------	--------------------------------

1 提案内容 大磯町立たかとり幼稚園〈提案1〉

(1) 研究主題のとらえ方

『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）』から、町立の幼児教育施設間で育ちの共有をすることが大切だと確認した。その中で、国府保育園とは隣接している点を生かし、交流などの保育活動や教職員交流を行っている。また、たかとり幼稚園内の学びの連続性を目的として、異年齢交流の推進を行い、小学校への円滑な接続につなげていきたいと考えた。しかし、まだ小学校との相互理解は不十分であるため、活動案を作成し、相互理解を進めていく必要がある。そして、今回の協議の視点を「幼児教育施設間における相互理解の促進」と「幼児教育施設と小学校間における相互理解の促進」の2つに分けてとらえ、研究を進めていくこととした。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ①幼児教育関係者と小学校教員との意識調査のアンケートの作成
- ②幼児教育施設間における相互理解の促進
- ③幼児教育施設（たかとり幼稚園・国府保育園）と小学校間における相互理解の促進

(3) 研究の内容

- ①幼児教育関係者と小学校教員との意識調査のアンケートの作成
教職員間で互いの保育・授業に対する理解について意識調査をするためにアンケートを作成した。
アンケート実施後、相互理解に必要なことを読み取り、今後の計画につなげていきたいと考えている。
- ②幼児教育施設間における相互理解の促進
幼児教育施設間の相互理解については、「縦軸」と「横軸」の視点で研究を進めることとした。

「縦軸」…たかとり幼稚園内の3年間の学びに連続性をもたせ、ねらいをもって保育計画を作成。
「横軸」…隣接している国府保育園の年長児とつながりをもち、小学校へ円滑に接続。

ア たかとり幼稚園内の相互理解の促進について

- a 毎日の好きな遊びの時間を合わせたことによる主体的な遊び
意識的に1日の保育の流れを合わせることでみえたこと
教員一人ひとりが他クラスの子どもへ意識を向けたことにより、他クラスの様子を把握することができ、教員の意識改革につながった。また、子どもたち同士の学年を超えた関わりが深まった。
- b 異年齢の交流(ほかほかタイム)をよりよい交流にするためのデータに基づいたグループ編成と、計画的に行うための指導案の作成
 - a) 誕生月、保育年数、出生順の人数比を把握する。
 - b) データの分析をし、子どもに付けたい力を明確にしてグループ編成を行う。
子どもの特徴が一番集団としてとらえやすかった出生順で異年齢交流のグループを分けることにした。
 - c) グループの実態により、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を明確にする。
 - d) 各学年の人数比をできるだけ均等にする。
人数比が活動や子どもの姿に影響するため、今後はグループの見直しをしながら継続していく。

イ 国府保育園との相互理解について

- a 国府保育園の幼児組に園庭を開放し、遊ぶ時間を合わせて交流をする
横軸の年長児同士のつながりを見据え、好きな遊びの中で様々な学年の園児と交流を行うことで園児同士が親しみをもって関わり、安心した小学校の接続につなげる。
- b 互いの園の行事に園児が参加し、交流をする
行事の参加を通して、各園の教職員が互いの保育内容を知ることにより、相互理解を行う。

c 年長児同士の年間活動計画を立て、ねらいを明確にした交流をする

d 小学校の行事や授業などに一緒に参加する

たかとり幼稚園・国府保育園の年長児はほとんどの園児が同じ小学校に就学している。小学校の行事や授業と一緒に参加することで安心感が生まれ、ともに就学することへの期待を膨らませている。

e 町内の幼児教育施設（大磯幼稚園・たかとり幼稚園・国府保育園）の教職員の連携

町立の幼児教育施設の教育目標・教育課程・保育計画などを3園で共有し、一貫した保育活動を行う。

ウ 幼児教育施設（たかとり幼稚園・国府保育園）と小学校間における相互理解の促進

a 園児・児童の交流を通して小学校就学時の抵抗感を少なくする

現在行っている交流のねらいを明確化することで保育活動と小学校の授業とのつながりを視覚化し、小学校への接続を円滑なものにしていく。

○国府小学校の行事への参加や授業への参加

○国府小学校の給食体験

b 教職員間の交流から連携を探る

互いの授業や保育を参観し週日案や活動案からそれぞれのねらいや計画を知り、理解し、協議を行うことで相互理解の促進を図る。

○週日案、指導案を用いた互いの保育、授業の参観、協議

c 見通しをもった計画の作成

教育委員会を中心に架け橋プログラム研究会を開催し、教職員間の相互理解を進めているが不十分であると考え。町内の幼児教育施設と小学校間でアンケートを実施し、教職員の意識改革や相互理解につなげていく。また、見通しをもった計画を作成することで子どもの育ちを円滑につなげていく。

（４）まとめと今後の課題

○誕生月・保育年数・出生順をデータ化する

・幼児の姿が明確になり、よりよい異年齢のグループ編成へとつながった。

・一人ひとりの幼児の育ちを「幼児期までに育ってほしい姿」の関連で見取り、小学校への接続につなげることとした。

○異年齢交流の重視

・取り組みを通して、クラスの子どもだけでなく、園全体で子どもを育てるという教員の意識改革ができた。

・教員の意識が変化したことで、日々の保育にも変化が見られ、子ども主体の活動を重視し、時間をかけて見守ることができるようになった。

○国府保育園との連携

・近距離である利点を生かし同じ小学校へ就学する意識を5歳児保育・教育の中で重視することを通して、なだらかな接続を図ることとした。

○小学校への接続

・アンケートを基に、計画的なねらいをもった保育・授業内容につなげていきたい。

・大磯町の利点を生かし、教育の連続性・一貫性について理解を深めていきたい。

2 提案内容 港北幼稚園〈提案2〉

（１）研究主題のとらえ方

幼児教育と小学校教育の円滑な接続を推進するにあたり、個別に各幼児教育機関と各小学校間が相互理解を深め、それを持続させていくことには限界がある。文部科学省が募集した幼保小の架け橋プログラム事業の採択自治体に横浜市になったことを機に、これまでも長年に渡り、幼保小連携の歴史がある横浜市と横浜市幼稚園協会との協働を深め、架け橋プログラムについて、継続的に、また、市内全体を見通した幼児教育と小学校教育との相互理解を深めていった取り組みから今後の接続の在り方を探ってみた。

（２）研究方法及び研究の重点

横浜市は「架け橋プログラム事業」の採択自治体として、3年間の成果を公表している。筆者はカリキュラム開発会議の委員として、長年にわたり幼保小連携事業に関与してきた。横浜市には公立幼稚園がなく、保育園、幼稚園、認定こども園など乳幼児施設が1500以上、小学校が350校以上存在する。このような大規模な自治体で、幼保小の取り組みを積み上げていくためには、自治体が幼保小を支える仕組みをつくり架け橋プログラムをリードしなければ、市全体の取り組みにはなりにくい。さらに言えば、自治体や学校の担当者が変わ

ったとしても、市全体としての幼保小の取組が衰退していかないようにするためには、どんな仕組みが有効なのかを、様々な魅力的な実践がどのように生まれていくかという視点から探ってみる必要があった。

(3) 研究内容

筆者が長年かかわってきた横浜市こども青少年局 保育・教育支援課 幼保小連携担当と横浜市幼稚園協会との協働した取り組みについて考察する。

①横浜市内の優れた実践がお互いにわかりあえた成果に係わる取組

○夏に行っている幼保小教育連携研修会

全体会と6つの分科会（5領域と特別支援）に分かれて7月に実施。特に分科会では、幼保小、それぞれが各分科会のテーマに即して事例を提案し、幼保小の参加者同士が話し合う。この指導講評は各乳幼児施設の園長や小学校長が行う。

好事例（小学校） 「環境」の分科会 2年生の生活科の実践

○幼稚園と小学校が行う公開保育・公開授業の実施

令和5年10月 本郷台小学校と新大船幼稚園の取り組み

令和6年4月 本郷台小学校のスタートカリキュラムの授業公開

この公開授業には、渡邊英則も講師として参加する

好事例（小学校） 入学して10日目の小学1年生がタブレット端末を使った学校探検と、その後に国語の授業を行う

○3年間に渡る「遊び」研究会の開催

- ・園・学校から研究員を募り、探究心を育む「遊び」研究会を開催（R4/5/6実施）
- ・年5回の研究会開催（講演会、実践交流等）
- ・校種等を越えたグループ編成による学び合い
- ・実践報告会・表彰を、市庁舎アトリウムで市民に向けて開催

好事例（小学校、認定こども園）、小学校、ゆうゆうのもり幼保園（自園）の実践

②その他の横浜市の活動

○「横浜版接続期カリキュラム 育ちと学びをつなぐ 架け橋プログラム編」を刊行

○「架け橋カリキュラムデザインシート」を作成

- ・「園と学校との対話を充実させる」 ～観（特に子ども観）の共有へ～

自ら学び、社会とつながり、共に、学びの芽生え、自覚的な学びにつなぐために、対話の「視点」と「ツール」を提供する目的で「架け橋カリキュラムデザインシート」を作成し配布する。連携推進地区や行政区ごとの研修等での利用による対話の機会が増加した。

○横浜市内18区各地区での幼保小の取組

○「架け橋プログラムだより」による事例等発信

○「実践事例集第9集」の発行

○学校HP用にバナー提供

○1年生の指導案に園での経験等の記入依頼

○小学校長会・小学校教育研究会等を通して説明・発信

(4) まとめと今後の課題

横浜市の「架け橋プログラム」は、幼児教育と小学校教育の接続を支える重要な取組だが、大規模な自治体であるため、すべての施設や学校に浸透するには課題が残っている。一方で、行政主導の仕組みにより、研修会や好事例の共有を通じて、幼保小連携の重要性が認識されつつある。特に、子ども主体の学びを促進する実践では、不登校や登校渋りの減少などの成果も報告されている。

また、幼児教育や小学校で求められている「主体的・対話的で深い学び」は、架け橋期の理解によって確実に深まっていくことができる。特に、文部科学省の事業を通じて研究や研修の機会がさらに広がってきた。

自園でも、幼保小の架け橋研修会等を通して、子どもの探究活動を事例としてまとめていくことで、教職員が遊び込む中で子どもの学びを深く理解することができた。

このように研修会に参加した保育者や教員が、子どもが主体的に取り組む保育や授業の好事例に触れることで、自らの保育や授業の中でも、「受け身的な学習」から「主体的な学び」への転換が徐々に進んできていると感じている。このような流れがさらに加速するように、さらにきめ細かく広がりをもてる架け橋プログラムを推進していく必要性を感じている。

3 研究討議内容

(1) 視点①について

- 幼保小の教員が教育内容や指導方法を共有し、教育の連続性を確保することが重要である。異年齢交流の「ほかほかタイム」や地域の祭りを活用することで、子どもたちや教職員同士の理解を深める取組が考えられる。
- 子どもたちの「探究心」や「とことん追求したい」という気持ちを支える教育を行うために、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指導計画に反映させることが重要である。統計的な視点を取り入れ、子どもたちの特性を具体的にとらえる工夫が求められる。
- 架け橋プログラムやオンライン研究会を活用し、幼児教育施設間や小学校との連携を進める。カリキュラム作成時には言葉のとらえ方の違いを調整するなど、具体的な工夫が必要である。

(2) 視点②について

- 幼児期の特性を踏まえ、「好きな遊びをとことんする」ことを重視し、小学校以降の教育でも「探究心」や「主体性」を育む指導計画を作成する工夫が求められる。小学校教育において、遊びを通した学びのよさを理解し活かすことが課題である。
- 子どもたちを出生順や月齢、保育年数でグループ分けし、その特性を統計的にとらえることで指導計画の改善に役立てる。直感的な判断だけでなく、具体的なデータを活用することで効果的な指導が可能になる。
- 幼保小の連携を通じて、小学校側が幼児教育の重要性を認識し、子どもたちの能力や可能性を深く理解することが必要である。中学校まで連携を広げる地域の事例を参考に、縦のつながりを意識した取組を進めることが理想的である。幼児教育施設間や幼児教育施設と小学校間の交流を通じて教職員同士が顔見知りになることで、子どもたちも親しみやすくなる環境をつくる工夫が求められる。

【まとめ】

- 教職員同士の交流を深めるためには、時間の確保が重要である。オンラインを活用するなどの工夫を取り入れることで、物理的な距離を超えたコミュニケーションが可能となる。顔見知りが増えることで、幼保小間の連携が円滑になり、教育の連続性を支える基盤が強化される。交流の機会を増やし、関係性を築くことが、子どもたちの教育環境の向上にもつながる。
- 幼保小間でカリキュラムを作成する際、言葉のとらえ方や子ども理解の相違が課題となることがある。これを解消するために、デザインシートや子どもの映像・写真を活用し、具体的な子どもの姿を共有することで相互理解を深める取組が必要である。こうした工夫により、教育の連続性を確保し、子どもたちの成長を支える連携が強化される。
- 幼保小間での交流は地域性を活かして密に行える場合もあるが、小規模園では広がりやが難しい現状がある。さらに、何をつなげるべきかという視点が地域や施設ごとに異なるため、共通の目標をもつことが重要である。幼保小だけでなく地域全体で参画し、卒園後や卒業後も子どもたちの歩みを追える社会の仕組みを築くことが望まれる。
- 園内での縦のつながりは比較的实践しやすいが、小学校への縦のつながりをつくることは課題となっている。同じ地域の幼児教育施設との関わりを増やし、連携を強化することで、小学校以降の教育や生活へのスムーズな接続が可能となる。地域全体での協力体制を築き、子どもたちの成長を支える縦のつながりを構築することが求められる。
- 子どもの姿に関わりの中でとらえるだけでなく、統計を活用することで新たな課題が見えてくる。直感的な観察と統計的な分析の両方を取り入れることで、子どもたちの特性をより深く理解し、指導計画や教育内容の改善につなげることができる。こうした多様な視点を活用することで、子どもたちの成長を支える教育の質を向上させることが重要である。

4 指導助言

横浜国立大学教育学部 教授 園田 菜摘 氏

- 提案1では、たかとり幼稚園のデータ分析が、一人ひとりの特徴をとらえようとする姿勢につながっているように感じた。どのような形で子どもたちをグループ分けしようかと考え、出生順で異年齢混合グループを分けて子どもたちの姿をとらえようとしているところが今後も楽しみである。さらに、地の利も生かしているところも感じられた。自園の近くに小学校がないとしても何らかの施設などはあるかもしれないので、それぞれの園が独自にその地域にできる交流や連携を目指していくのがよいのではないかと思う。地域で連携して、地域で子どもを育てていく気持ちで取組を進めてもらいたい。
- 一番の大事なポイントは、教員自身の意識が改革されたことである。どのような保育をしていくか、園の中

で意識し、子ども自身の育ちがどのように小学校に接続されていくのか考え、その視点こそが重要であるということを再認識したことは大きいと思う。引き続き続けていってもらいたい。

- 提案2は、横浜市の先進的な好事例であった。架け橋プログラムが何を指すべきなのか。何回交流したのかということが大事なのではなく、子ども中心としてその育ちを面白がりながら幼保小が対話を深めていくことが大切であることが伝わってきた。
- 各機関で言葉のとらえ方が違うことがあり、遊びの中で子どもが学ぶ環境設定と言言っても、教科の中で達成目標もあり、小学校の教員が理解することが難しい場合もある。しかし、本来は子どもたちがその教科においてもっと知りたい、学びたいと思う気持ちを育むことであるとするなら、知らないことを気づき発見することの喜び（知的な好奇心）を経験することが重要であると考え。それを踏まえると知的な好奇心を育むことこそ、幼児教育で求められていることだと感じる。それが、小学校以降での主体的な学びにもつながっていくと考えられる。
- より外部の方にも子ども理解を深めてもらうためには、幼保側がもっと積極的に、日々保育者が自然に行っている、一人ひとりの子どもに合わせた環境設定などを考える姿勢を言語化・具現化し（見える化）発信していくことだと思う。
- 幼稚園・小学校、両者から同じテーマ（今回は虫）があると連携するときに共通理解がしやすいと感じる。現在は、そのモデルが少ないが、今後はそのモデルとなるような事例を創造し、集めていくことが必要だと思う。

分科会 2 (協議主題 2)	架け橋期のカリキュラムの開発
-------------------	----------------

1 提案内容 秦野市立つるまきこども園〈提案1〉

(1) 研究主題のとりえ方

令和4年3月に文部科学省から「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」が出された。秦野市では、幼児教育と小学校教育の教育や保育の内容をつなぐために、互いの特性や目的を十分に理解し合い、子どもたちの成長や発達を支えていくことが大切であることをあげ、「育ちと学びをつなぐ架け橋期のカリキュラム手引書」を令和7年3月に作成した。そこでは、学びに向かう上で大切な目標への意欲・興味、粘り強く自分を調節し仲間と協力して取り組む姿勢など、「非認知能力（主体性、探究心、協調性）」をキーワードとして取り上げている。

本園では毎年、隣接する小学校との懇談の機会はあるが、個別のケースについての情報共有が主となり、「架け橋期のカリキュラム」の作成に至るには時間を要するという現状がある。そこで今年度は、「一人ひとりが自己発揮するための保育環境や援助を考える～架け橋期の子どもの育ちや学びをつなぐ～」を園内研究テーマとし、架け橋期の学びの基礎となる「非認知能力」を視点とすることにした。幼児期の学びや育ちを支え、小学校以降の学びにつなげていくことができるよう保育やカリキュラムの見直し、地域の幼稚園・保育園や小学校との連携を深めていくことにした。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ①非認知能力を育てていくための援助や手立てについて考える。
 - ・非認知能力（主体性、探究心、協調性）について、園内で共有する。
 - ・実践を振り返り、話し合う中で、園生活で培っている非認知能力について分析する。
- ②幼児教育と小学校教育との相互理解を図る。
 - ・卒園児と保護者の実態把握をするため、アンケートを実施する。
 - ・授業参観をする中で、子どもの姿から非認知能力を探り、園生活からの育ちを分析する。
 - ・鶴巻地区における園小接続会議を開催し、園小交流活動の計画、実施をする。
- ③地域との交流を図る。
 - ・担当教員等の連携と子ども同士の交流の年間計画を作成する。

(3) 研究内容

- ①非認知能力を育てていくための援助や手立てについて考える。

ア秦野市が育む3つの非認知能力「主体性」「探究心」「協調性」について園内で共有し、園生活を通して培われる非認知能力について、イメージや考えを出し合う。

イ実践を振り返り、話し合う中で、園生活で培っている非認知能力について分析する。

事例1 「5歳児4月中旬 ダンゴムシ探し」

◎主体性 ◇探究心 ☆協調性

【読み取り】

- ・月刊誌を見たことで、「キャベツをあげたい」「調理さんにもらえるかも」という思いが生まれた。
- ・経験したことをクラスの友達に伝える機会があったことで、他児の興味につながった。
- ・観察する中で「キャベツ食べたかな?」「食べているよ。だってかじられた跡がある」「コンクリートも食べるらしいよ」と、興味をもった事柄に対して深く考える姿が見られた。

【考察】

- ・乳児期から積み重ねた経験を生かして遊ぶことで、自身の力を発揮することや自信につながることを確認できた。また、幼児の興味に合わせて、タイミングよく図鑑を用意したことで、興味が広がり自分で調べたり、友達と一緒に考えたりする機会につながった。

②幼児教育と小学校教育との相互理解を図る。

ア卒園児と保護者の実態把握をするため、アンケートを実施する。「卒園後から入学式前までの子どもと保護者の心情」「園に望むこと」「入学後一カ月過ぎた時点での子どもの思い」「学校生活で楽しいこと」などを回答してもらう。

イ4月入学当初から約2ヶ月間、小学校の授業参観をする。観察した記録を「非認知能力（主体性、探究心、協調性）」の視点で読み取ると共に、本園卒園児の在園中の姿と入学当初の姿のつながりから、園校種間を超えた支援の在り方を考えた。

ウ園小接続会議では、各園校長や行政職員が介し、現在の鶴巻地区の子どもの姿や目指す子ども像を共に考え、共有した。また、各園5歳児担任と小学校1年生担任での話し合いでは、幼児の活動の一場面をもとに各園での取り組みや、園小の学びのつながりなどを話し合った。「育ちと学びをつなぐ架け橋期のカリキュラム手引書」に記載してある様式を活用し、「園小合同指導案」や「振り返りシート」を作成した。実際に活用する中で、互いのねらいが明確になり、子どもに対しての関わり方や環境設定などにも効果的だった。

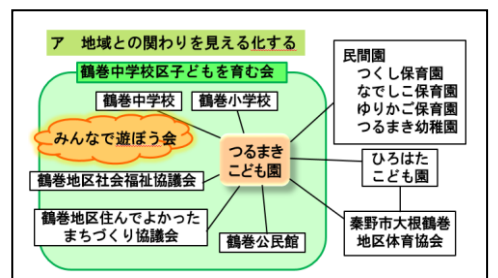
③地域との交流を図る。

ア交流の年間計画を作成する。その中で、小学校・民間園に園の保育を見てもらう機会や、地域に出向きつながる機会を設け関係作りに努めていく。

【アンケート結果からの読み取り】



【卒園児の姿からの読み取り】



(4) まとめと今後の課題

- 幼児教育と小学校教育の互いの育ちや学びを園小の教職員が理解し合うことで、子どもが安心して意欲的に過ごすことにつながることを確認した。今後も、互いの教育を見合い、情報を共有する機会を設け、園小中の連携を図っていききたい。
- 今年度から、民間園との園小接続会議を行い、つながりをもてたことが大きな一歩である。教職員の交流から幼児同士の交流につなげ、地域で話し合うサイクルをつくっていききたい。
- 保育教諭が非認知能力についての知識をもつことで、子どもを見取る視点が深まり、小学校の教職員への子どもの姿の伝え方が変わってくることがわかった。小学校では、学習面の評価が重視されるが、園での姿を伝える際には、非認知能力を視点にし、個々が園生活で培った力や心の育ち、園生活で大切にしていたことを伝え、内面的な育ちからアプローチをしていきたい。

2 提案内容 つるま幼稚園〈提案2〉

(1) 研究主題のとりえ方

幼児教育から小学校へと資質・能力を育むためには、子どもが主体的に自己発揮できる環境を整えることが求められる。義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の架け橋期において、環境の変化に不安を抱く子どももいる。そのような中で、幼稚園と小学校の連携（接続）は非常に重要である。

今回「架け橋期のカリキュラムの開発」を考えるにあたり、幼児教育と小学校教育相互の理解を深める必要があると感じた。自園の取組を通じて、幼稚園で育まれた資質・能力がどのように小学校へつながるかを考え、そのつながりを基にカリキュラムを充実させることが、架け橋期のカリキュラムの開発（見直し）につながると考え、研究を進めることにした。さらに当園は近隣の小学校との連携機会が少ないため、大和市幼保こ小連絡協議会に出席し、他施設の教員と意見交換を行った。その内容を基に、今後の小学校との連携（接続）を考える。

(2) 研究方法及び研究の重点

- 幼児教育と小学校教育の特徴
- 幼児教育とアプローチカリキュラム
- 小学校のスタートカリキュラムと生活科
- 自園の取り組みから小学校へのつながりを考える
- 大和市「幼保こ小連絡協議会」に出席して

(3) 研究内容

- 幼児教育と小学校教育の特徴

幼児教育では、遊びを通して「感じる」「気付く」「工夫する」「関わる」「興味をもつ」などの経験を重視しはつきり自覚しないままたくさんのかことを学んでいる。一方、小学校教育では、目標への到達度を重視し、自覚的な学びを進める。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）を基に、幼児教育と小学校教育の接続を図ることが重要である。

- 幼児教育とアプローチカリキュラム

幼児教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、環境を通して行うことを基本としている。幼児期にふさわしい生活を展開し、遊びや生活を通じて資質・能力を育む。アプローチカリキュラムでは、小学校の先取りではなく、小学校以降の教育を見通しながら基盤となる資質・能力を育む。

- 小学校のスタートカリキュラムと生活科

スタートカリキュラムは、幼児期の学びを基礎に、主体的に自己発揮し、新しい生活を創り出すためのものである。生活科では、学びの芽生えから自覚的な学びへの連続性を大切にし、幼児期の体験を生かした活動を構成する。

- 自園の取り組みから小学校へのつながりを考える

幼児期に育みたい資質・能力を育むためには、「主体的・対話的で深い学びの過程」を重視する必要がある。

『主体的な学びの過程』

周囲の環境に興味や関心をもって積極的に働きかけ、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

『対話的な学びの過程』

他者との関わりを深める中で自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

『深い学びの過程』

直接的・具体的な体験の中で、見方・考え方を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し、生活全体を意味あるものとしてとらえる「深い学び」が実現できているか。

【つながりを考える】

子どもたちが興味や関心をもって取り組む姿から「主体的・対話的で深い学びの過程」を読み取ることで、幼児期に育みたい資質・能力（幼児期の終わりまでに育ってほしい姿）が見えてくる。その幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえ、小学校の各教科等における資質・能力とのつながりを考えていく。

エピソード①（つばめ委員会のはじまり）

つばめの巣作りをきっかけに、つばめに興味関心を持ち、仲間と気づいたことを伝え合いながら観察や必

要なものを作る中で、生命の不思議さを感じたり、数や文字に触れたりする経験をした。そのようなことを通して、「自然との関わり・生命尊重」「自立心」「豊かな感性と表現」「数量・図形、文字等への関心・感覚」などが育った。このことは、小学校の「生き物への親しみをもち、大切にしようとする力（生活）」「生き物の育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかける力（生活）」「互いの話に興味を持ち、相手の発言を受け止める力（国語）」「数や文字等に関心を持ち表現する力（算数）」につながると考える。

エピソード②（おみせやさん）

やりたいお店ごとに集まった仲間と一緒に、品物や必要なものを作り上げる中で、「自立心」「協働性」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」「数量・図形、文字等への関心・感覚」などが育ち、それらは、小学校教育の「自分の思いや考えを伝え合う力（国語）」「互いの話に興味を持ち、相手の発言を受け止める力（生活・道徳・国語）」「共通の目的や実現に向けて、工夫したり、協力したり、助け合う力（生活、道徳）」「面白さや楽しさを感じ、楽しく発想や構想をしたり、自分の見方や感じ方を広げたりする力（図画工作）」「物の個数やお金、文字などについて考える力（算数・国語）」につながると考える。

○大和市「幼保こ小連絡協議会」に出席して

協議会では、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校の連携について意見交換を行った。小学校側からは「名前の読み書き」「衣服の着脱」など、幼稚園側からは「交流の機会を増やす」「共同でカリキュラムを作成する」などの要望が出され、幼稚園と小学校の連携（接続）のために、園と小学校の相互理解等の課題があることが分かった。今年度自園で、「小学校とのつながりをつくるために、学校に連絡をする」「小学校との引き継ぎの際には、子どものできる、できないの評価だけではなく、幼児期に育まれてきた資質・能力を踏まえた子どもたちの育ちの姿を伝える」ことに取り組んでいきたいと考える。

（４）まとめと今後の課題

幼児教育と小学校教育では、教育目標や方法に違いがあるが、架け橋期では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を円滑な接続の手掛かりとして活用し、資質・能力を育むことが重要である。また、小学校入学当初は、生活科を核としたスタートカリキュラムを実施し、学びの連続性を確保することが大切である。自園のカリキュラムを見直す中で、5歳児の遊びや生活から徐々に自覚性を芽生えさせることが重要だと感じた。さらに、3歳児や4歳児の遊びの中で興味や関心を育む経験を積み重ねることが、主体性や意欲を高める学びにつながることも分かった。小学校との連携機会が少ない現状を踏まえ、近隣の園・小学校との交流を増やし、相互理解を深めることが必要である。これにより、協力関係や情報共有が進み、架け橋期のカリキュラム開発の一步となると考える。

3 研究協議内容

（１）視点①について

- 園小接続を行っている市町村があるが、これから園小の関係をつくっていく場合は、顔の見える関係づくりから始め、横や縦のかかわりを意識する。子どもの育ちに節目はあっても区切りはないため、互いに大切にしていることや課題とを感じていることを理解し合い、目指す子ども像を共通にして、架け橋期の在り方を考えていくことが大切である。
- 架け橋期については園小の意識の相違が出やすいので、市町村のアプローチカリキュラム（公私立共通）ができるとよい。架け橋カリキュラムをこれから作成していく地区は、行政が中心となって作成していくと共通理解が図れるのではないかと考える。
- 園小の連携のために園小の担当者を配置し、同じ視点で話し合い、目指す子ども像を共通にすることが大切である。しかし、共通理解や情報交換のためには、現実問題として時間をつくるのが難しいため課題となる。
- 教員が架け橋カリキュラムを理解するために、園小で互いを理解することが必要である。

（２）視点②について

- カリキュラムの作成を行い、ホームページやアプリなどにより、保護者や地域に共有していくことが大切だが、作成して数年は試行錯誤して進めていくようになる。架け橋期のカリキュラムを継続すると形骸化してしまうことがあるため、その都度ねらいやポイントなどを双方が意識し続けることが大切である。
- 保育活動を写真などにより可視化して保護者に知らせ、教育的なねらいなどの理解を得られるとよい。課題としては、継続していくことの難しさを感じる。教職員間の意識や考え方に温度差があると難しさがある。

【まとめ】

- 架け橋期のカリキュラムの開発では、園小だけではなく行政の支援のもと、互いを理解し横や縦のかかわりを意識した架け橋期のカリキュラム（公私立共通）を作成することが望ましい。
- 架け橋期のカリキュラムの実践においては、園小互いに教育的なねらいなどを共通理解して進めたり、実践を振り返ってカリキュラムを定期的に見直したりして、意識を高くもって継続していきたい。なお、園小の取り組みの実践は、写真などを活用し可視化して、保護者や地域にも広げて連携を図っていくことが大切である。
- 小学校教員は学年の移動だけではなく、小学校の異動もあるため話し合われていた内容が次年度に継続されるのが難しい。そのため行政が中心となって、継続した内容で話し合いができるとうい。

4 指導助言

聖徳大学大学院 講師 篠原 孝子 氏

- グループ協議では活潑な意見交換がなされ、対面で語り合うことの大切さを感じた。また、本研究協議会には、小学校教員の参加があり、架け橋期に対する関心の高さが伺えた。このような機会を通して小学校教員も架け橋期の認識を深めることは大切である。
- 園小の関係は、まず「顔」の見える関係をつくることから始めるが、行政の橋渡しが有効となる。東京都では年2回「連携の日」をつくり、公私立園が情報交換をする機会を設定している。このような会において、互いの教育・保育を理解し合うことが幼児理解につながり、園と小では、子どもの育ちと学びを伝え合うことで、学びをつなぐことになる。
- 架け橋期では、「自分からやってみたい」という自発性が育つことは学術的にわかっている。幼児期は遊びの中で子どもの「やりたい」という思いを保育者が支え、発達の意図を踏まえた環境がポイントとなる。5歳児は丁寧過ぎない指導をすること、1年生は、子どもが考えるチャンスを奪わない、知識を押し付けない、否定しないで待つことが大切である。
- つるま幼稚園は、原点にもどり学びを得た保育実践を理論づけし、育ちに結び付いていることを保護者に自信をもって伝えていることは効果的である。日常の保育を振り返って伝えるということは大切なことである。
- 秦野市立つるまきこども園は、公立園としてできる限りのすべてのことを行っている。非認知能力について焦点化しながら、子どもの育ちを確認することは保育の原点だと思う。近隣の小学校と交流や連携を図ることは、大事だということを再認識し、さらに子どもについて情報交換していく。この地区のよいところは？何をしたら伸びるか？など、わくわくするようなテーマにして話し合うと充実してくると思う。地域の幼児教育施設との横のつながりも大切にしていこうとよい。